

校歌にこめられた願い — 育つ^{いとなみ}営為の原点 —

三重県立四日市農芸高校生徒会誌『こたち』三五号、一九九四年三月一日

野崎 智裕

〈特別寄稿〉

校歌にこめられた願い

—育つ営為の原点—

教諭 野崎 智裕

はじめに

いま正門から銀杏並木と歩む道の左右に分散して合計五つの鉄筋校舎が立ちます。その本館二階と新館三階をつなぐ通称渡り廊下の下に校歌の歌碑があります。体育の授業でグラウンドへ行く途中や、放課後の部活で各クラブがランニングや坂道ダッシュに励むかたわらに佇み、ふだんはかえりみられること少ない。その碑文に、作曲家・大澤壽人氏と共に作詞者・壽岳文章氏の名前が刻まれていることに勤務しだして間もなく気づきました。素直に伝統校だと思っただけです。あの大部の三冊本『神曲』の訳者が校歌の作詞をしてくれたのですから。以下に綴るのはその時から今までの校歌とその時代をたどった軌跡の一部です。

(一) 一九五〇(昭和二十五)年という年
校歌の来歴を探そうとした時、手がかりとしてあったのは平成元年版の同窓会編『会員名簿』に記されていた次の事柄でした。昭和二十五年九月に当時の校長先生下河茂嗣氏が、現在の筑波大学の前身東京高等師範学校時の同級生大塚高信氏(英語学)を介して壽岳氏に作詞を依頼し、同氏は十月上旬来校し構想をまとめたこと。次いで後述の壽岳氏直筆と伝えられる校歌歌詞の額にも記されている註と同じ、地名とローマのうたびと(詩人)の名前。この二つの事実が発点でした。

この年は、日本社会にとっても転換点と言える年となりました。千円札の初めての発行、復興の呼び水となった特需を生み出した朝鮮戦争の勃発とそれに応じた警察予備隊

(自衛隊の前身)の創設、朝日・毎日新聞社が名古屋で朝夕刊発行を再開するなど、景気が回復しかかって「廃墟からの再建」が軌道に乗り「戦後の経済と社会の基礎」はようやくできつつあったのです。

そのことを裏づけるかのように、この年の国勢調査では前回昭和二十年に比べ、海外から引き揚げてきた人たちを中心に千七十二万人増えて総人口は八千三百十九万人を数え、別の統計によれば、日本の農家数が、一九二〇年から八十四年のうちで最高を記録したのでした。

文教関係に目を転じると、食糧不足・インフレ・生産減退・失業の余波は教育現場にも及び、校舎が資材不足で建てられないとか、児童生徒の衣服、教科書の用紙や学用品・食料にいたるまで諸物資が極端に不足した状況がごく普通であったと記録されています。ガリオア資金によるパン完全給食が八大都市で始まったものの、これが全国で実施されるまでにさらに二年を要したのでした。

高等学校に即してみると、いわゆる新制高等学校が設置されて、県ごとに学校の統廃合が行われ、しばしば学校名も変更されたのです。このことは本校についてもあてはまり、農芸高校という現在の校名は、河原田村が四日市市と合併して改めてつけられたもので、校歌制定の年は、正式名を「三重縣河原田高等学校」としていたことを明記しておきたいと思えます。三重県内全体で中学校卒業後高校へ進学する割合は、三十二・六%(現在は約九十八%)で

十五歳の七割近くが義務教育を終了してすぐ社会に出ているのです。

四日市高校が四泊五日で戦後最初の東京方面への修学旅行を実施したり、高校の英語教師が集い三重県高校英語教育研究会を発足させたり、混乱が残るうちにも確かな歩みが始まったとみてとれるのではないのでしょうか。この年三月三十一日付で三年連続の改変が進み、農業課程、家庭課程が同時に置かれる総合制となった「河原田高等学校」に新しい校長先生が赴任されたのです。



(二) 下河茂嗣校長先生

各種の記録と下河茂朗氏(校長先生御長男)、下河嗣朗氏(校長先生御次男)の手紙を総合すると、校長先生は、明治三十二年三月十二日福井市生まれ、地元中学校卒業後に東京高等師範学校文科第三部(英語)に進学し、卒業後郷里の学校を振り出しに石川県、東京都の教諭を歴任、その才能と優れた指導力が注目され、当時の津高が三顧の礼を尽くして昭和十一年三重県へ。津高教頭を経て、昭和十五年には木本高校校長となられ、以降県下各校長を歴任、員弁高校校長在職のまま昭和二十八年五月五日永眠されました。享年五十二歳。



下河茂嗣 校長先生

河原田高等学校校長としての在任期間は一年でした。この間、まず五月に校章制定委員会を設けて、職員生徒から校章のデザイン原案を公募、応募作品の中から全校投票によって校章は決定されました。この時の校章こそ、現在も在校生に受け継がれている四農校の校章にあたります。

特筆すべきは、校務に精励される一方で、表1にあげたような多彩な英語参考書やテキストを数多く、それも三重県に着任されてから旺盛に公刊されたことです。令息方の御記憶のうちには「夜はいつも机に向って遅くまで書き物をしていた」姿がありありと浮かぶということです。精力的な執筆は、代表作「三位一体・総合英語の新研究」にも反

主要著作一覧表(表1)

(泰…泰文堂、篠…篠崎書林より
各々刊行されたことを示す。)

	書名	初版刊行年月日	ページ数	発行所	備考
1	三四年の英作文	昭和 8. 10. 25	344	泰	
2	三位一体総合研究 英語の新研究	昭和 12. 8. 25 昭和 28. 7. 30改訂	760	泰	
3	三位一体総合研究 初級英語の新研究	昭和 24. 11. 20	366	泰	
4	英語文法作文習 解釈基礎練習	昭和 25. 11. 25	112	篠	裏表紙の隅に「S 26. 5. 23 上京、篠崎書林にて受領」と記されている。
5	英文法とその問題集	昭和 27. 2. 5	128	篠	
6	中級総合英語問題集	昭和 27. 1. 25	206	篠	
7	高校生の英作文	昭和 27. 10. 15	356	泰	「昭 27. 10. 21 受領 下河茂嗣」とサイン
8	初級総合英語問題集	昭和 30. 3. 5	190	篠	

映されています。この本は、英文解釈・英文法・英作文の三分野を一冊にまとめて、そのわかりやすい内容で、版元の最新図書目録によると現在も版を重ねて五十刷を教え、書店に並んでいます。全国学校図書館協議会選定図書に指定されている良書でもあります。著者としてA・W・メドレー氏の名があがっているのですが、実際は下河校長の著述になるものです。余談めくのですが、昭和三十年代始め頃県下の高校英語教員有志の間で、死去された下河氏に代り、この本を改訂し、さらに利用者の期待に応えようとする話を持ち上ったこともあると伝えられます。なお、先の表1にあげた外に本校卒業生で職員の田中佐喜男氏が昭和二十五年学生の当時、下河校長自ら教科書として自著「イソップの話」(泰文堂、九十四頁)を用い、英語の授業をされたそうですが、この本に限ってまだ実物を見ることができません。もしご存知の方がみえてご一報頂けたら幸いです。

校歌に戻ると、京都府向日市に自宅のある壽岳氏の許へ度々出向いて「戦争の終った今、新しい時代を生きぬくための自由で創造的な」校歌の制定を懇請されたと伝えられています。この時期には、四日市から京都へ出るには国鉄草津線廻りで片道約三時間半ほどかかり、京都大学卒業後勤務の関係で京都に住まわっていた御長男宅にもしばしば立ち寄り、折にふれて次のように語られたということです。

「今度赴任した河原田高等学校では、温室を作り、マスカットぶどうも栽培している。日本人がこんな高級品を皆喰えるようになってほしいものだ。そんな時代はきつと来るはずだ。」

「生徒も一生懸命やっているよ。」
「これからの日本の将来を拓くのは日本の若者だ。食糧も足りない、工場設備も戦争の賠償で持ち去られた三流国日本が立ち上るためには、お前達が、何としても、意欲的に学問に取り組んで欲しい。それが日本が今後世界の中で生きる途だ。」

三番目の引用のうちにある「お前達」とは、御令息も含めて、若い世代の人々、後に続いて日本社会の柱となる若人みんな、と読みとれるのです。このような想いが、壽岳氏はじめ関係者に伝わり、校歌誕生の原動力となったのでしよう。没後に大塚氏が労をとり編集された下河茂嗣追想録「偲ぶ草」(泰文堂、非売品)の巻頭を、河原田高等学校校正門前で、学校の象徴であったつたのからまる校舎を背景にした校長先生の写真が飾っています。



稲の穂と撫子の花を
組み合わせた校章

(三) 作詞者・壽岳文章氏

大塚氏を介して面識を得、親交を結んだ下河校長の意を汲んで壽岳氏は河原田高等学校まで足を運んで下さった。



作詞者・壽岳文章氏
(壽岳章子氏提供)

この年壽岳氏は「カトリシズム」(弘文堂)、「ブレイク詩集」(酣燈社)の公刊をはじめとして六篇の論文を各紙に相次いで発表。関西学院大学文学部教授としての仕事に加え、奈良女子大・京都府立大・大谷大等にも一年間あるいは数年間出講し始めて、五十一歳の旺盛な学究と教育活動は着々と実を結びつつあったのでした(著作集第六巻の年譜・「わが日わが歩み」より)。この当時の農芸高校近辺を空中写真で見ると、一面の田んぼの中に高岡山など

の色紙が、講演会に招いた折に下河校長宅で揮毫されたことを併せ考えると、校歌作製のために来訪された時期に近い頃とする見方も可能性がありましょう。

さきの校歌歌詞とこの色紙の文意をあわせて見ると、二つの事に気づかれます。広汎な識見とそれを過不足なく表現できるよくなれたことが自在に用いられていることです。順番は逆になりますが、壽岳氏色紙は文末にあるように中国の隱逸詩人・陶淵明の詩に題材を求めて書かれています。岩波文庫に収められた上下二巻の陶淵明全集を通して読んでみると、先の色紙の文言がどれかひとつの詩編を引用したのではなく、主に「詩四言 時運」「答龐參軍」「擬古」「詠貧士」という全然別の詩の大意を総合したものになっているのです。これら四つの詩はおよそ「徳の実践にたゆまぬ人」「わたしという人間が最期まで本物であるかどうか示したいと思う」気概、「志を同じくして、榮達に未練なく、自分の仕事にうちこみ、成功失敗にも心を囚われなかった」人物像をうたいあげたものです。そういう古人と時代こそ離れたものの、どうして同じ思いが通わないことがあるのだろうか、いえ(私にも)同じ気持ちがある脈々と波打っているのです。これが色紙全体の大意であるのですから、壽岳氏が下河氏との交際の内幕を、あるいは下河先生の教育者としての姿勢に接するうちに生まれ出た共感を刻み、あふれ出た心象風景が色紙にも見い出されるのではないかと思われるのです。

の丘があり、その入り口に学校があるという様子がみられます。壽岳氏は大塚氏と共に来校、生徒の寄宿舎があった高台に登り周囲の風景も心ゆくまで眺めつくし湯の山で一泊とも伝えられています。この折、お土産として下河氏は、日本本店で戦後ようやく再開されたばかりの笹井屋さんの銘菓「なが餅」を選んだそうです。

下河氏の依頼の趣旨は、第三節に前述しましたが、この熱意と壽岳氏自身の直接の見聞、そして学識が調和し昇華されて校歌歌詞はおよそ次のような構成をとりまします。

一番では河原田の古い地名河後をあげ、農業の大切さを述べ、続く二番は学校からの眺望と若者の気概について言及、しめくりの三番で、労働を基本とした高校三年間の意義を説き及ぶのです。これら三番にわたる歌詞全体を通覧すると、もうひとつの壽岳氏と下河氏を結ぶ絆がうかがわれます。それは下河先生御次男宅に伝えられる壽岳氏筆の色紙に躍動しています。文面は次のようです。

草のいおりのあけくれを

われ楽します琴と酒

太古の民にあらねども

同じおもいの通はざらめや

淵明の誌意をうつつ

壽岳文章 (落款)

どのような経緯で、いつしたためられたのか不詳とされます。ただ、推測をたくましくすれば、やはり岡本一平氏

校歌歌詞に立ち帰ってみても、達意の文と常日頃の研鑽のほどがよく示されています。校歌三番には「むかしローマのうたびとがすべてに勝つとたたえたる額の汗のとうとさ」とあります。この一節は、ローマのうたびと詩人ウエルギリウスの主著「農耕詩」第一巻穀物・第一四五行が出典で、この原著書を丹念にたどりラテン語原文から日本語に訳された河津千代氏の訳文では、「生活がきびしく、必要に迫られた時、不屈の労働がすべてを克服した。」(傍点・野崎)という部分に対応するところです。昭和二十五年という時期には、河津氏によれば、この本の訳書は越智文雄氏訳の一冊だけが刊行されているのですけれど、直筆の校歌額にラテン語で引用と説明が施されているところを考えると、やはり原典に直接なじんでみえたと受けとるべきと思われる。原文・原典の視点をきちんと中心にすえて、「不屈の労働」を「額の汗のとうとさ」と表現しうるバランスのとれた繊細な感覚と力量が、こなれた一言一句に結晶しているのでしょう。

壽岳氏は長命で、数多くの足跡を残され一九九二年一月十六日他界されました。



(四) 作曲家・大澤壽人氏

このように成った詞に音の泉を考案されたのが、作曲家大澤氏です。作曲家へ依頼がなされるまでのいきさつは、今のところ不確かなままにとどまっています。令夫人大澤澄子氏、御令息壽文氏によると大澤氏と壽岳氏は、神戸女学院大学で教鞭を同じくし、また個人的にも大変親しい間柄であったことが知られます。おそらく壽岳氏が交際を深めていた多士済々のうちから、その品格と才智を見込んで作曲者に抜てきしたのではないのでしょうか。この推測を裏づけるのが、校歌歌詞を記した額の存在です。前節までも少し言及したこの額は、校長室に掛けられています。額の中央部に縦十七・六センチ、横六十・五センチの金地の紙に毛筆で記されたためられているものです。壽岳氏直筆と学校に言い伝えられ、その冒頭に、作詞と並べて作曲大澤壽人と記されているのです。

大澤氏の略歴を『音楽家人名辞典』(一九九一年一月日外アソシエーツ刊)から引用してみましよう。氏は明治四十年八月一日兵庫県神戸市生まれで、昭和五年に関西学院高等商学部を卒業されたのですが、(以下は解説を引用)在学中、神戸オラトリオ協会を創立して自ら指揮者となる。一方、ピアノリストとしての修業も積む。昭和五〇八年アメリカ留学。ボストン大学、ニューイングランド音楽学校に学ぶ。ロジャー・セッションズ、デボウトらに師事。続いて九〇十一年フランス留学。この

を愛した才人あまり時間を与えてくれず、昭和二十八年十月二十八日惜しまれつつ四十七歳で逝去。早すぎると言える死を悼んで大阪の朝日会館で約二ヶ月後に「大澤壽人の夕」という偲ぶ集まりがもたれたのでした。主催者に名を連ねたのは、朝日会館、朝日放送、大阪中央放送局、大澤壽人の会、関西交響学協会、新日本放送の六つの会ならびに組織団体。もって生前の仕事ぶりが自ずと示されます。この時参会者に配られたパンフレットにあげられている氏の作品の一部は、シューベルト、ヨハンシュトラウスの合唱曲の編曲、ピアノ独奏曲の作曲、ソプラノ独唱曲の作曲、組曲「雪国の歌」の作曲、合唱と管弦楽の分野にあたるペガサス狂詩曲と交声曲、みどりの祭典の作曲というように一つの枠にとどまらず、豊かな広がりを感じさせるものとなっています。氏を敬慕し、作品群を慈しんだ人々の間にもある気持ち、前のパンフ中で主催者のお一人T氏は次のように述べています。

残された作品は相当に膨大な量である。今日の会でそのほんの一部をきいていただくわけだが、これだけが大澤壽人でないことも、よくおふくみ願いたい。

もちろん、寿命があつて、あの勢いで仕事をすすめていってらつてれば、それに越したことはない。しかし、芸術家には美しい死に方というものがあるものである。大澤君もその選ばれた一人として、死んでいった。惜しい、いとしいという感情を、みんなに抱かせ



作曲家・大澤壽人氏
(大澤壽文氏 提供)

間、バドルー交響楽団を指揮、マリア・クレンコ、ジュリマルシエツクスの共演を得て「第二ピアノ協奏曲」を発表、好評を博した。以後、室内楽、歌曲、舞台音楽、劇音楽など広範にわたって作曲および指揮活動を展開。日本シンフォネット・オーケストラ、日本ポプス交響楽団を組織したほか、大映、松竹の映画音楽や、宝塚歌劇団の仕事も担当。また、神戸女学院大学音楽科教授を務めるなど幅広く活躍した。作品に「さくら幻想曲」「ヴァイオリン小協奏曲」「舞踊組曲「雪女」」など。

と紹介されているように、芸術家として多方面に多彩な活動を展開してみえたのでした。しかしながら天はこの音楽

て死んでいった。美しいではないか。(以下、省略) テレビがまだなかったこの時期、マスメディアの最先端といえる映画の場面に合わせて創出される映画音楽(大映映画「夜明け前」など)を作曲。好評を博して当初の関西地区のみの放送から全国放送になったラジオ番組「シルバertime」の番組製作に携わり、同時に毎年のように芸術祭に新作を寄せながら、また後にコーちゃんの愛称で親しまれた越路吹雪氏らを自宅に招いてはシャンソンの芸域について語り合ったりと、ごく限られた例からも、西洋音楽のエッセンスを惜しみなく多くの日本人に伝えようとした真摯な姿と音楽に寄せる愛情がしのばれてきます。

昭和二十五年九月には大澤氏が自作や西洋音楽を紹介する月2回放送のラジオ番組「BK シンフォネット」がスタートしました。この数ヶ月後、壽岳氏の詞にト長調の旋律がつけられて校歌誕生となりました。令夫人によると夜に集中して仕事をこなすことが多かった大澤氏四十四歳の感性がまたひとつ花開いたのでした。



(五) 校歌私註

校歌を制定して在校生と後に続く学生たちみんなに心のもしびを頼み願って実行した先人の方の足跡をここまでたどってみました。このような昭和二十五年の達成は、今日まで受け継がれ、全校生徒の身分証明書も兼ねる生徒手帳の一三頁にわたって掲載されています。それを見ながら、校歌にこめられた願いについて、少しだけ解釈を試みたいと思います。

校歌

作詞 野岳 文章
作曲 大沢 寿人

1. 歴史は古き河後に
生くるこの日をよろこびて
土に親しむあさゆふの
いのちを開く智慧のかき
この河原田の学びやは
若うどわれらのこころのふるさと
2. 柑橘みのる丘の上
夢大き日の眼をあけて
東を見れば海の音
さやけく胸にしみわたる
この河原田の学びやは
若うどわれらのこころのふるさと
3. むかしローマのうたびとが
すべてに勝つとたたへたる
顔の汗のたうとさを
知りて三とせの春と秋
この河原田の学びやは
若うどわれらのこころのふるさと

一番の歌詞は、やはり昭和二十五年という戦後の世相を強く感じます。生命あつて今日一日を過ごせる、生きて今ここにあることに感動できる人々の姿が見えてくるような気がするのです。壽岳氏令嬢章子氏によると、壽岳氏自身戦中戦後、自ら畑を耕やすことを好み、野菜作りなどもお上手だったという体験をお持ちです。それで、ここは机上の想像ではなく、自ら実感し体得した農作物のいのちを育て生活する張り合いを、農業高校の正統な役割に重ね合わせるかのように言い切ったところでしょう。人が生きていくうえで、農業がどれほど大切なものか、大上段に構えてではなく、平明に生をつないでいくゆるがせにできない真理を指摘したともいえるのかもしれない。この一番の一節には、農が食糧と深くかかわって日本人の目の前にあった昭和二十年代から、心穏やかに地域社会のうちから地球をとらえる柔いものの方と行動が、一人ひとりに要望される現代社会に通底する視点が堅固なのです。

校歌一番の冒頭は、河原田町の古来からの地名・河後にまつわる「歴史」が早くから始まっていたと記されています。作詞者は『大日本地名辞書』の「河原田村」の項目で引かれている「和名抄」という日本最古の百科辞典にある解説を根拠にして、学校所在地の由緒を強調するのですが、最近の成果も一部まじえながら、少しだけ補足してみましよう。

地域の歴史を多角的に総合して把握する試みとして刊行

三重県立四日市農芸高等学校校歌

作詞 野岳 文章
作曲 大沢 寿人

Moderato

が進む「四日市市史」(既刊八巻)を河原田に注意しながら読み進めていくと、この一帯の個性が浮びあがってくるのです。農芸高校グラウンドとみかん山一円には、宮ノ谷、南谷、三神山の三遺跡があり、須恵器の断片が発掘されていると報告されています。早く「万葉集」巻九に「我が豊三重の河原の磯の裏にかくしもがもと鳴くかはづかも」(姓不詳伊保麻呂)と内部川の河原が織りこまれていた所に始まる、内部川・鈴鹿川との長く深いつながりにこそ最も注意が払われるべきでしょう。

奈良時代では伊勢国国府・国府寺・一宮という行政機構をつなぐ交通の要所ですし、七百年からの平城宮の跡地で見つかった木製の札木簡のひとつには「三重郡河後郷白米五口」とあるのです。つまり、この一帯でとれたお米を税金として首都へ運んだ事実が、川の水の性質をよく知り活用し、闘いながら家族を養い各々の人生を全うした先人たちの生をひそやかに示唆しています。

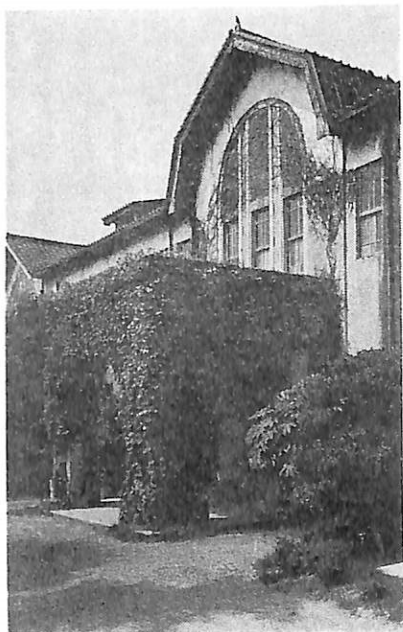
十一世紀後半に、ここに伊勢神宮の所有地が新たに耕作され出し、所有をめぐって様々なかけひきがあった古文書も残されています。河後郷司・河後御厨という名称も散見されて、川とおそらくは伊勢湾を自在に行き来した人々の面影も豊かに想像されるのです。

河後から河原田へという変化は、江戸時代になってはつきりしてきます。詳細は最近の地名辞書に譲るとして、この二つの地名に共通するのが、やはり河という文字だとい

うところ心引かれます。伊勢国、三重郡、河後郷、という上からの行政区分を越えて活動していた過去無量の人々を引き合わせて、また各々の道へ踏み出していく様を何代にもわたって無言で見つめ続けた水の流れが、この地に独自の陰影を残して今につながるのを見とれるのです。江戸時代には宿場と宿場の中間地点で、伊勢神宮へ参拝する人々がしきりに通った参宮街道も河によって一区切りされていた時代は、ひいおじいさん、おばあさんの代まで眼前にありました。今在学している生徒たちが学校へ行き帰りに、かつての道筋そのままに通ったり、横切ったりしている旧道と呼ばれるやや狭い曲りかげんの舗装道は参宮街道そのものなのです。明治からの近代以降も、鉄道関西本線の要所として位置づけられています。

およそここまで、ごくごく簡略に、古からのたおやかなこの土地の変遷を偲んでみても、河原田を田舎だの、市街地から遠く不便だのと決めつけることなどできないと思うのですが、読者諸賢は如何思われますでしょうか。

この節の最後にはやはり、校歌全体を通して繰り返されるリフレイン「この河原田の学びやは若うどわれらのこのるのふるさと」についてふれておくとよいでしょう。地元の実業家熊沢一衛氏（正門に記念碑がある）が北勢地区の農業を担う若人の育成を願い、私財を投げうち土地と資金を提供して昭和四年二月二十一日成った校舎。自動車が珍しかったこの頃、大量輸送の根幹であった鉄道に乗って河



旧校舎の本館

原田駅で停車するたびに大勢の人々の目をひく威容をもちいつか誰言うともなく「白亜の殿堂」と呼ばれ知られていた建物。その姿が、初めて見た壽岳氏の胸に刻まれたことは容易に想像できるのです。ここで学んだことを、培った人間関係を、春秋に富む若い人たちが誇りとして、人生が与える数々の苦難に負けることなく、転んでも転んでも自分の足で立ち上る時の力を持ち続ける源となりますように。あるいは、三年間、時間をかけて学び得たことがそのまま自分にとって自信となり、それもこれも若い日々の喜びであったとふりかえり、歳月を重ねて自分のありようをうなずける人という祈りさえ聞こえるかのように。

むすびにかえて

冷夏だ、異常気象だと騒がれ、お米をめぐる大きな動きがあった今年（一九九三年）の十月初旬、壽岳氏が登ったと言われている本館横のみかん山に足を運んでみました。晴れた日の午後で、三年生の果樹専攻班が森下先生の指導下熱心に手入れをする姿がありました。四十三年前にも視界に入ったであろう校歌二番の字句にあるような、東の方角の鈴鹿川の河口、伊勢湾の広がり、そして、その向うの半島の遠い影さえもはっきり見えています。ここから巣立っていった社会を支えていった数多い「若うど」の活気ある話し声さえ近いように感じたのでした。

設立当初から、この学校には地域を愛し、教える育てる営みを大切に思った先人の熱意がありました。その一端に拙文を綴る間に触れることができたのは望外の幸福です。できるだけ、事実即して具体的に心がけたつもりなのですが、半世紀近く時間が立っていることや勤務の合間をぬっての試みで果せぬことも残ってしまいました。それらについては、別の機会に再度挑戦しようと考えています。

五節にわたって紹介しえた校歌にまつわる諸事実は、関係者（とりわけ下河茂朗・嗣朗両氏、壽岳章子氏、大澤澄子・壽文両氏）と農芸高校旧・現の職員方の深い御理解と御協力があって初めて知り、伝えていくことができるようになりました。そのことに心よりお礼申し上げます。また、各種の統計をはじめとして参考文献を探し確認する際には

県内公共機関・施設の職員スタッフ各位にお世話になりました。記して感謝の意を表わします。

最後に、下河嗣朗氏からの御勧めもあって、校長先生の自著八冊を二学期最初の「現代社会」科の授業で、一年生五クラス、二年生三クラスに紹介できたことを書き添えます。

〈参考文献〉

- ・「四日市農芸 五十周年記念誌」（一九七九年十一月二十三日刊行）
- ・「こだち」二十九号（一九八八年三月一日発行）

〈注〉

- (1) 「年表 日本歴史」第六卷（一九九三年三月二十五日筑摩書房刊行）の昭和二十五年の項目を参照。
- (2) 中村隆英氏「昭和経済史」（一九八六年二月一日岩波書店刊行）一七八頁、二〇六頁
- (3) 平凡社版「百科便覧」八十六年版（一九八六年三月二十五日刊行）
- (4) 「学校の歴史第三巻 中学校・高等学校の歴史」（一九七九年五月二十五日第一法規刊行）二二九頁
- (5) 山住正己氏「日本教育小史——近・現代——」（一九八七年一月二十日岩波書店刊行）巻末の年譜
- (6) 注(4)と同じ

(7) 『三重県教育史 年表統計編』(一九七九年三月一日三重県教育委員会刊行)

(8) 筆者の高校一年生の夏休み頃、名古屋の大きな書店でこの本を初めて見て、その場で買い求め、一冊を読み通しました。わかりやすく、読むほどに英語が面白くなった覚えがあります。

(9) 梶三郎氏(元四日市高校校長)のご教示による。

(10) 笹井晃氏(笹井屋社長)のご教示による。

(11) 下河嗣朗氏「若竹」(東京都立竹台高校新聞、一九八七年三月十日刊に所載)

(12) 河津千代氏訳『牧歌・農耕詩』(一九八一年九月二十日未来社刊)校歌歌詞を記した壽岳氏の額についての解説にあたっては、河津氏の懇切な指導を得ることができました。深く感謝しています。

(13) 河津氏前掲書の三九四頁にある「訳者あとがき」

(14) 壽岳氏の足跡については、朝日新聞一九九二年一月十七日付朝刊、翌十八日付同紙コラム「天声人語」などで略歴を知ることができる。またその温容と人柄については、住井すすきさんとの対談集「時に聴く」(一九八九年人文書院刊)や「福原麟太郎随想全集」

第八卷(一九八二年福武書店刊)に収録された昭和三十年二月十八日付以来の全十九通の手紙を一読されまことを勧めます。また、家庭での氏の人となりに関しては令嬢章子氏との共著「父と娘の歳月」(一九八

八年十二月二十日人文書院刊)と没後の「呼びかわす声」というサブタイトルがついた「想父記」(一九九三年七月三十日人文書院刊)を参照下さい。

(15) 荒牧亀太郎氏(大澤氏と共に大阪放送局で番組製作を担当されたディレクター)のご教示による。

(16) 同右

(17) 『四日市市史』第七巻、二十六頁

(18) 同右資料編 古代中世編所収の河後御厨関連の文書群

(19) 本校OB職員 豊田 智氏「河原田農学校の建物が消えた日(昭和六十二年八月十二日)」(「こたち」二十九号、一九八八年三月一日刊)

(付記) 本稿を書き上げて間もなく、壽岳章子氏より思いがけず学校あてに御年賀状を頂戴した。その末尾、全校生徒向けのメッセージを引用します。

「貴校の皆々様何より、生徒の方に、どうかすがすがしくさわやかに日本を支えていってと伝えて下さいませ。

お元気に '94年を」(傍点・野崎)

